

英語発音指導実態調査とその考察

田 口 賀 也

Abstract

This paper discusses the results of a survey of 67 Japanese EFL students about their previous English pronunciation learning at school. Approximately 13% ($n=9$) indicated that they have not received pronunciation lessons before or do not remember receiving such instruction. The majority of the lessons that the rest of the respondents described does not seem concerned with the connection between pronunciation and communication. Followed by a description of pronunciation lessons at junior high and high schools in Japan in terms of the content, the length, and frequency of the instruction based on the survey results, I suggest possible causes for the lack of attention to pronunciation instruction in order to improve communication skills and future directions of pronunciation teaching in English classrooms in Japan.

はじめに

文部科学省は2003年3月「英語が使える日本人」の育成のための行動計画をとりまとめ発表した。この文書には日本人が目標とすべき英語力が以下のように掲げられている。

国民全体に求められる英語力

「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」

- 中学校卒業段階: 挨拶や応対、身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる(卒業者の平均が実用英語技能検定(英検)3級程度)
- 高等学校卒業段階: 日常的な話題について通常のコミュニケーションができる(卒業者の平均が英検準2級~2級程度)

専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められる英語力

「大学を卒業したら仕事で英語が使える」

- 各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定

(文部科学省, 2003, p.1)

以上のように、この行動計画は英語を日常で使えるような日本人育成を目指したが、日本人の英語運用能力が向上しているという話は聞こえてこない。実際、文部科学省によって設置された「外国語能力向上に関する検討会」は2011年に「5つの提言と具体的施策」を発表し、「英語が使える」日本人育成のための行動計画で提案したことは一部達成されなかったと認め、生徒に英語習得の必要性を感じさせることや大学入試で英語検定試験（英検やTOEFL[®]、TOEIC[®]など）を取り入れることなどを提案している。

英語運用能力はさまざまなことを学び訓練しなければ身につかないため、英語が使える日本人育成が期待したほどなされなかった原因を特定することは不可能であるが、意思伝達能力育成のために不可欠な要素の一つである英語発音指導が実施されずにいることも一因ではないかと考えている。田口（2012）では、大学生を回答者とした中学校・高等学校における発音指導について調査結果を示したが、指導内容について中学校・高等学校との区別は行わなかった。本稿ではその区別を行い、内容だけでなく、受講した時間・頻度、また、学んでどのように役に立ったと考えるかについても調査し、前回より詳細に実態を把握することを目的とした。

本稿では、まず意思伝達能力育成のために発音指導が重要であることを説明し、英語教員養成課程・英語教育研究での発音指導についての現状を紹介したうえで、大学1年生を回答者とした中学校・高等学校における発音指導に関するアンケート結果を説明し、これからの発音指導についての方向性を提案していく。

コミュニケーションにおける発音の重要性

上に挙げた文部科学省の「英語が使える日本人」提言での目標にある「コミュニケーション」は音声でのコミュニケーションであるか、読み書きであるのかは判然としない。ただ目標の次に掲げられている「主な政策課題」には、英会話サロンを設けて留学生との交流を推進する、留学する日本人を増やす、大学入試センター試験でリスニングを導入するなど、音声を介するコミュニケーションを念頭に置いていることがうかがえる。文科省の提言を待たずとも、一般の日本人が英語を使えるようになりたいと言った場合、多くは英語を話せるようになりたいという意味であるといっても異論はないだろう。

音声によるコミュニケーションができるようになりたいと考えている一方、その目標が達成できていないのはなぜか。前述の通り、原因を特定することはできないが、発音指導がないがしろにされていることに一部関連があると考えられる。

口頭で意思疎通を図るには、ある一定の英語発音ができなければ、文法・語彙が完全であったとしても通じないことが多い。また脚注に引用した通り、英語教授法の研究者たちは、指導がないがしろにされている発音はコミュニケーションに於いてとても重要であると主張している

(Beebe¹⁾, 1978; Celce-Murcia et al.²⁾, 2010; Elson³⁾, 1992, Morley, 1991; Wong⁴⁾, 1986)。単語をつなぎ合わせて話せばそれでいいという声もあるが、聞き手に大きな負荷をかけるような話し方は「英語ができる人」からはほど遠い。

英語教員養成課程と英語教育研究における発音指導の位置づけ

発音はコミュニケーションにおいては重要な要素であるにも関わらず、日本では英語教員養成課程で発音に関する十分な教育が施されていないようである。柴田らによる英語教員音声指導に関する実態調査(2006)では、回答した224名の中学校・高等学校教員のうち過去に音声学を受講したことがある教員は69.8%にとどまり、また、発音矯正を受けたことがある教員は47.9%であった。また Gilbert (2010) は発音指導がどれほど教員養成課程でなされていないかについて、先行調査を概観し説明している。それによると、イギリスでの調査では回答した33名の英語指導者の半数以上が、十分な指導を受けたとはいえないと回答し、アメリカでの第二外国語としての英語を指導する教員養成修士課程(MA in TESL)では、音声学に関連した講座でどのように学習者に指導すべきかという点は重要視されていないとある。またスペインでは、回答した英語教師の75%が発音指導についての教育をほとんど受けていないとした。カナダでは回答した67名の英語教師のうち何らかの発音についての教育を受けたとしたのは30%にとどまっている。

このように日本のみならず、英語教師は教壇に立つ前に発音指導について指導を受けずに済んでしまうケースが多いようだが、おそらくこれは発音指導に関する研究が積極的になされていないことと無関係ではないだろう。

さきほどの Gilbert は Brown (1991) と Deng et al. (2009) を紹介し、いかに英語教育関連の学術雑誌で発音に関する論文が少ないかを示している。また、多くの英語教師の一大関心事である、発音は授業で教えて効果が出るのかといった現実的に応用できるような研究は Baker & Murphy (2011) によると、過去数十年で6つにとどまっているという。

-
- 1) "It is important for ESL professionals to take note of the fact that pronunciation-like grammar, syntax, and discourse organization-communicates the very act of pronouncing, not just the words we transmit are an essential part of what we communicate about ourselves as people" (p.121).
 - 2) "This focus on language as communication brings renewed urgency to the teaching of pronunciation, since both empirical and anecdotal evidence indicates that there is a threshold level of pronunciation for nonnative speakers of English; if they fall below this threshold level, they will have oral communication problems no matter how excellent and extensive their control of English grammar and vocabulary might be" (P.8).
 - 3) "Pronunciation is clearly a central factor in students' success in making themselves understood" (p.229).
 - 4) "In fact, if we look closely at the components of the communicative process, we will see that pronunciation is one of the more important means by which we achieve our communicative objectives" (p.227).

中学校・高等学校における発音指導の現状

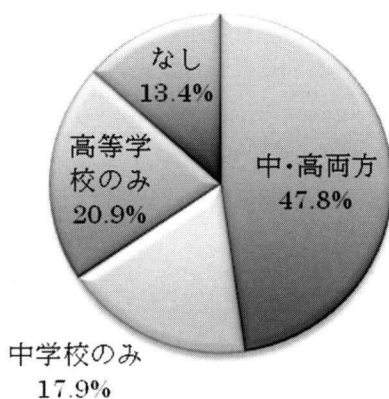
これまで、音声を紹介するコミュニケーションにおいて発音は重要であるにもかかわらず、教員養成課程や研究においても十分に注目されてきたとは言い難い現状を紹介した。それでは実際、日本の中学校・高等学校では発音指導はなされているのか、一体どのような内容であるのか、これらを調べるため、2012年7月に、東京にある私立4年制大学の経済学部所属の1年生67名にアンケート調査を実施した。回答は記名式で成績とは一切関係のないこと、調査目的に使用することを説明して実施した。出身高校についての調査は実施していないため、確定的なことは言えないが、関東近県の中学校・高等学校出身者が大半であると推測される。また年齢は18-20歳が大半を占めている。つまり、母数は多くはないが、2006年度前後から現在の関東を中心とした中学校・高等学校での英語の授業時間における発音指導のおおまかな輪郭を描くことができるのではないかと考えている。この調査では日本の中学・高等学校の状況を断定的に述べることはできないが、筆者の知る限り生徒・学生からの視点で調査したものがないため、これを基礎調査として現状把握の第一歩となると考えている。まずは顕著に目立つ点を記述し、続いて考察を進めていく。

発音指導の実施割合

アンケート回答者は発音指導を受けた時期と内容・時間・頻度、指導は役に立ったと考えるか、などについて選択肢を選び回答した。発音指導を受けたことがなければ記名のみでよいと伝えた。その学生は67名のうち9名(13.4%)であった。つまりこれらの学生はこれまで発音指導を受けたことがない、あるいはその記憶がないと回答したこととなる。

また発音指導を受けた経験があると回答した学生のうち、中・高両方で受講したことがある学生は32名、中学校でのみは12名、高等学校でのみは14名であった(下記図1参照)。

図1 発音指導をいつ受けたのか



発音指導内容

どのような指導を受けたかは、中学校と高等学校で似た結果となった。以下の棒グラフにあるとおり（縦軸が回答数、横軸は回答項目）、上位4項目は、B, C, J, Kと共通であった。ただ、中学校（図2）においては、B, Cが突出しており、高等学校（図3）ではC, Jが同数で一番多くの回答となった。

図2 中学校における発音指導内容

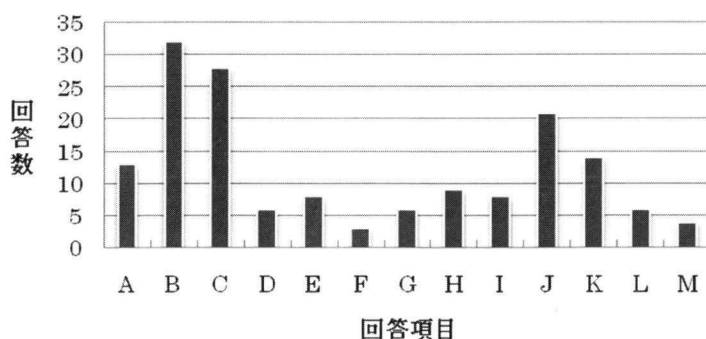
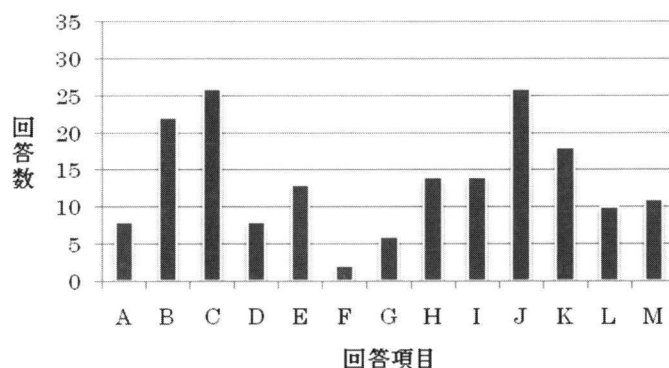


図3 高等学校における発音指導内容



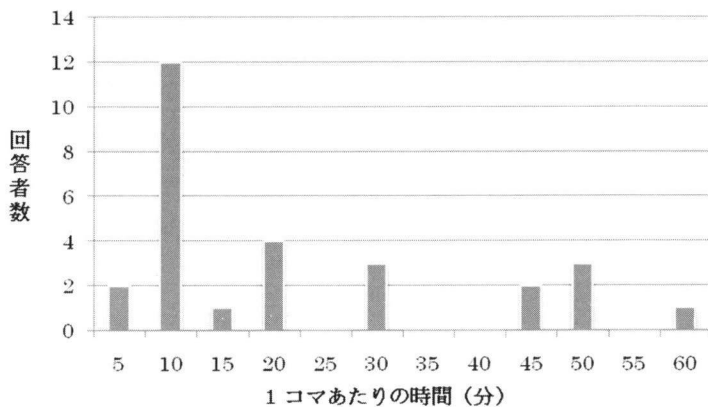
注：選択肢内容

- A) モデルとなる母音・子音の音を聞いてまねをした
- B) モデルとなる単語を聞いてまねをした
- C) モデルとなる文を聞いてまねをした
- D) 発音記号を学びどのような音をだすべきか練習した
- E) 会話活動を通じて話しながら発音に注意する練習をした
- F) 先生に発音を聞かせて直してもらった
- G) 音の聞き分けをやった
- H) スペリングと発音の規則について教わった
- I) 母音・子音の音の出し方（口の動かし方など）を教わった
- J) アクセント（ストレス）（1つの単語の中での強弱）について教わった
- K) イントネーション（上がり下がり）はどのような場合に上がる・下がるのか教わった
- L) 名詞・動詞などは強く、冠詞・代名詞などは弱く言うことを教わった
- M) 前後関係によって強く読むべき音とそうでない音があると教わった

発音指導時間と頻度

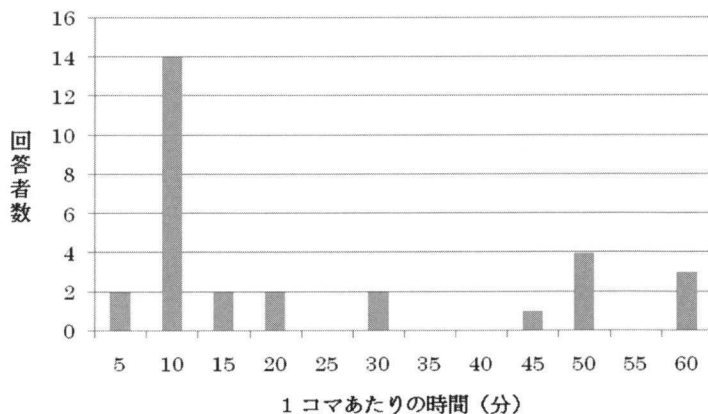
回答者は発音指導が1回の授業時に占める時間を回答した。結果を5分刻みに集計すると、中学校での発音指導時間で一番多かったのは10分間（12名）、以下はばらつきが多く見られた（図4参照）。10分間指導を受けたと回答した12名によると、発音指導頻度は1週間に1回と2回が各3名、4回が2名、3回、5回、月に1度、あたらしい単元ごとが各1名ずつであった。

図4 中学校における1コマあたりの発音指導時間



高等学校では回答が多い順に10分間（14）が中学校同様一番多く、他はばらつきが見られた（図5参照）。頻度は1週間に2度が一番多く（6名）、続いて、3回、5回が3名、1回と4回がそれぞれ1名ずつであった。

図5 高等学校における1コマあたりの発音指導時間



アンケート結果に対する考察

上記では発音指導実施割合と指導内容、そして発音指導時間と頻度を回答が多くあったものを中心にアンケート結果を紹介した。ここではこの数字について考察し、発音指導の現状はどのようになっていると推測できるかを考えていく。

まず発音指導実施割合であるが、発音指導を受けた自覚がないと考えられる学生は13.4%であると述べた。これには受講していたのに受講した記憶がない、あるいはアンケートに積極的に答える意志がない学生の数字が含まれている可能性があることから、鵜呑みにできないため、より正確に知る方法を模索したいと考える。

次に発音指導内容は実際どうなっているのか。中学校・高等学校いずれでも「モデルとなる単語を聞いてまねをした」、「モデルとなる文を聞いてまねをした」、「アクセント（ストレス・1つの単語の中での強弱）について教わった」の3項目が上位を占めた。単語・文のリピート、単語内でのストレスの位置についての指導が教室でなされる発音指導に多く見られるようだ。

また、発音指導は役に立ったかとの問いに対する回答を見ると、なぜ、上記の3項目に回答が集中しているのか推測できる。受験で出題される問題の質と関連があるようだ。高等学校での発音指導が役に立ったと答えた学生21名のうち、14名（66.7%）がセンター入試、あるいは受験に役に立ったと回答している。中学校での指導内容と高等学校でのそれとを比べてみると、中学校では単語の真似が一番多くの割合であった一方、高等学校では単語の中でのストレスの位置を学ぶことと文を真似することが同率1位を占めている。この傾向はまさにセンター入試の「英語」の発音に関する問題に対処するためであることが、センター「英語」の過去問題集や対策問題集を見ると分かる⁵⁾。概観すると単語におけるストレスの位置に関する問題が例年出題されている。アンケートでは文を真似する練習を実施している割合も高いことが分かるが、文脈によるストレスの位置に関する問題が数年前までのようにセンター入試で出題される可能性を見込んで、高等学校で指導していると考えられる。

指導時間と頻度について見ると、中学・高等学校10分程度という回答が一番多い。通常授業の一部を使って指導をしている様子がうかがえる。頻度はばらつきが多く見られる。ただ、授業の一部を用いていると考えれば、週に2、3回という回答が比較的多くあったことは妥当であろう。

授業における発音指導の今後の方向性

小規模ではあったが、アンケート結果から、発音指導がなされていないと考えられる割合は1割から1.5割程度ではないかと推測される。これは田口（2012）と類似の数字である。発音指導内容

5) ここ数年は文脈によるストレスについての問題は出題されなくなっている。

に関しては、受講したことがあると回答した学生によると、前回のアンケート同様、音声によるコミュニケーション能力と結びつくような指導はあまり行われていないことが分かる。

発音指導は大きく母音・子音などについて聞き分けや口を動かしてみる練習 (segmentals) と単語・文などの単位で強く読むべき音節 (強勢・ストレス) や音程の上下 (イントネーション)、弱化した部分とストレスのある部分とのリズムを意識した練習 (suprasegmentals) と、両方のバランスを保って実施されなければならない (田口, 2012)。しかし、実際に行われている指導は受験を意識したためか、単語の中でどこにストレスを置くか、あるいは単に単語や文を真似する練習が中心となっているようだ。

一方、意味を意識した発音指導と考えられる項目 (E「会話活動を通じて発音を意識しながら会話する練習をした」、M「前後関係によって強く読むべき音とそうでない音があると教わった」) は中学校において合わせて全158の回答のうち、12 (7.6%)、高等学校では178の回答のうち、24 (13.5%) の回答にとどまっている。

英語が使える日本人になりたい、または国としてそのような人材を育成したいと考えるならば、明示的な説明をした上で、段階的に意味を意識した発音指導と会話演習を教室で実施する機会を増やす必要があると考える (具体的な方法の一例は田口 (2012) を参照)。印字された単語や文を読ませる、単語のストレス位置を正しく認識させる、また生徒・学生に任せきりの会話練習をさせるだけでは意思疎通能力を向上させることができるとは考えられない。秩序だった説明と会話活動との両方を通じて、意思を伝える状況で学んだ発音を発揮できるよう練習することが効果的であると考え。また個々の学習者の発音を教員が聞き、指導し、学習者自身が自主学習できるような方法を伝える必要もある。これらの指導の有効性については、現在実証すべく筆者は研究・調査をしている。

また上記で述べた通り、英語教員養成課程でもまだこういった発音指導に関連した訓練は不十分である上、研究も十分なされていない現状も改善しなければならない。

おわりに

国際ビジネスコミュニケーション協会によると、2011年度の公開テスト・団体特別受験制度 TOEIC[®] 受験者は、合わせて227万人であった。年々この数字は増え続けている。TOEIC 熱が高まっているからといって英語運用能力向上を目指している日本人が多いと言い切ることはできないが、英語を勉強しようという気持ちをもつ日本人が多いことは事実であろう。受験や昇進・昇格の道具として英語を学習する動機を否定しないが、英語教師としては、意思伝達の道具として使えるように学習する手伝いができないかと切に願う。ないがしろにされてきた発音指導について懐疑的な教師を説得できるよう、実証的な研究を進め、学校・学生生活で避けては通れない英語学習が生徒・

学生にとって実りあるものとなるよう、一助となりたいと考えている。

参考文献

- Baker, A., & Murphy, J. (2011). Knowledge base of pronunciation teaching: Staking out the territory. *TESL Canada Journal*, 28(2), 29-50.
- Beebe, L. (1984). Myths about interlanguage phonology. In S. Eliasson (Ed.), *Theoretical issues in contrastive phonology* (pp. 51-61). Heidelberg: Julius Groos Verlag.
- Brown, A. (1991). *Teaching English pronunciation: A book of readings*. (Ed.) London: Routledge.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., & Goodwin, J. M. (2010). *Teaching pronunciation* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Deng, J. et al. (2009). English pronunciation research: the neglected orphan of second language acquisition studies? University of Alberta, *PMC Working Paper WPO5-09*
- Elson, N. (1992). Unintelligibility and the ESL learner. In P. Avery & S. Ehrlich, *Teaching American English pronunciation* (pp.229-236). Oxford: Oxford University Press.
- Gilbert, J. B. (2010). Pronunciation as orphan: What can be done?" *As We Speak, newsletter of TESOL SPLIS, 2010*, 参照先: http://cup.es/other_files/downloads/esl/clearspeech/orphan.pdf
- 国際ビジネスコミュニケーション. (2011). TOEIC®テスト受験者数の推移. 参照日: 2012年8月28日, 参照先: http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/about/transition1979_2011.pdf
- 文部科学省. (2003年3月31日). 「英語が使える日本人」育成のための行動計画. 参照日: 2012年8月29日, 参照先: http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf
- 文部科学省. 外国語能力の向上に関する検討会 (2011年6月30日). 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策. 参照日: 2012年8月29日, 参照先: www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/.../1308401_1.pdf
- Morley, J. (1991). The pronunciation component in teaching English to speakers of other languages. *TESOL Quarterly*, 25, 481-520. doi: 10.2307/3586981
- 柴田雄介, 横山志保, 多良静也 (2006年11月28日). 「音声指導に関する教員の実態調査」(学会発表) 第6回日本英語音声学会九州沖縄四国支部研究大会, 宮崎公立大学.
- 田口賀也 (2012). 日本人英語学習者に対する意味を意識した発音指導方法. *経済論集*, 37 (2), 91-106.
- Wong, R. (1986). Does pronunciation teaching have a place in the communicative classroom? In D. Tannen & J. Alatis (Eds.), *Georgetown University round table on languages and linguistics 1986* (pp. 226-236). Washington DC: Georgetown University Press.